

自由花蕊

Flowers of Freedom

日本語

自由の花蕊 | 中正記念堂 1階 常設展示ホール

指導 | 文化部

主催 | 国立中正記念堂管理处

〒100012 台北市中正区中山南路21号

<https://www.cksmh.gov.tw/>

開館時間 | 毎日9:00～18:00

(休館日については、旧暦の大晦日、春節、二二八平和記念日、システムメンテナンス)

自由の花蕊

闘士の手の中に咲き、公民の街頭に咲く。
異議者の筆先に咲き、囚われた者の弓に咲く。
殉教者の胸に咲き、未来を見つめる子どもたちの瞳に咲く。
自由の花蕊は、やがて民主の春となって咲き誇る。

自由は天から降ってくる贈り物ではなく、永遠に保証された権利でもない。
世界中の自由を求める闘いの中で、そして自由を叫ぶ文化作品の中で、花としての自由の比喻がしばしば見られる。台湾文学では、頼和の「自由花」や楊逵の「押し潰せぬ薔薇」があり、街頭運動では「野百合」や「太陽花」学生運動がその象徴となった。

自由とは花蕊であり、その花蕊を守ることは自由を守ることに他ならない。この普遍的な訴えは、台湾だけでなく、世界中の民主と自由を求める国々が共有する経験である。展示では、異なる時代・地域で民主と自由を求めた人々の叫びもあわせて紹介する。「自由の花蕊」というテーマは、世界に向けた共有と共感の象徴であり、自由の花蕊は時に枯れることもある。だが、民主を守る力があればこそ、その花は再び咲き続ける。

1980年に建設された中正記念堂は、この場所で、台湾における、統治者を崇拜する神話、民主化を求める抗議運動、そして移行期正義の実践とその限界を見つめてきた。現在、その特徴的な建築様式とスケールの大きさから、台湾を訪れる多くの外国人観光客にとって必訪の場所となっている。私たちは、ここが単なる撮影スポットではなく、台湾の民主化の道のりを理解するための入り口となることを願っている。今日の台湾の自由と繁栄の背後にある、民主主義の花をどのように育んできたのか、その軌跡をぜひご覧ください。

五つの主要単元

本展は五つのセクションで構成されている、「世界の民主化の波」、「台湾における民主主義と自由の歩み」、「未来への展望」という3つテーマに分かれて構成されています。

第1単元 | 世界の波

世界における民主化の波を振り返りながら、第二次世界大戦後、世界各地で民主化と人権を求めて行われた重要な闘争を紹介します。ここでは、台湾の民主化における歴史的な節目を簡潔にたどるとともに、言論の自由を求めた運動の重要人物である鄭南榕に焦点を当て、台湾の民主化の文脈を理解する手がかりとします。鄭南榕は生涯を通じて、台湾は世界の中で確かな存在となるべきだ、真に自由な国家となるべきだと訴え続けました。その精神は、次の世代に「台湾が自由な国となる機会」を追求する力を与えています。

第2単元 | 声を奪われた時代

戒厳期の台湾で、統治者が行ったさまざまな社会的統制手段——禁歌、思想・言論・行動の自由の制限、取調室の再現など——を展示する。

第3単元 | 台湾 言論の自由への道

1945年から現在に至るまで、台湾が47年に及ぶ権威主義体制を経て、民主と自由を勝ち取るまでの歩みを中心に紹介する。

第4単元 | トラウマ

白色テロの政治受難者たちの人生劇場や家族への手紙、遺書を通して、国家権力による人権侵害が個人・家庭・社会に与えた深い傷を見つめる。

第5単元 | 輝きを放つ花

書籍、絵本、漫画、映画、音楽作品などを通して、現代台湾が歴史をいかに見つめ直しているかを示す。また、来場者自身の経験から、民主と自由の尊さを私たちと共に語り合う場ともなる。

展覧会概要

鄭南榕エリア | 台湾が自由国家となる転機

1984年、鄭南榕は「100%の言論の自由」を掲げ、雑誌『自由時代』シリーズを創刊した。彼は雑誌を通して理念を発信し、当時の厳しい言論統制体制に挑んだ。1988年12月、『自由時代』は許世楷が起草した「台湾共和国新憲法草案」を掲載。これにより鄭南榕は台湾高等法院檢察処から「叛乱容疑」で召喚を受けた。1989年4月、警察が強制逮捕に踏み切った際、鄭南榕は台湾独立の信念と「100%の言論の自由」を貫くため、自ら火を放ち、命を絶った。彼の死は、台湾が真の自由と民主に向かう大きな転換点となった。

世界の波

全体主義政府による統治は、常に人びとの監視から始まる。人びとが専制政治に抵抗する手段は、真実を語ることから始まる。歴史が証明するのは、そびえ立つ壁の高さではなく、その壁に投げつけられた卵の数である。今日、私たちが敬意を表するのは、銃や弾丸ではなく、銃口に挿された花々なのだ。

この世界的な波の中で、台湾は決して傍観者ではなかった。1960年代から2000年にかけて、人権と自由を求める運動が沸き起こった。1980年代に言論の自由を擁護した鄭南榕は、「世界で生きる気持ちで、台湾で生きよう」「私たちは小国に住む取るに足らない民だが、素晴らしい国に住む素晴らしい人びとなのだ」と語った。台湾は、世界中の自由を求める人びととともに、花と血で、支配者の銃口に立ち向かうことを選んだ。

輝きを放つ花

チェコスロバキアに生まれ、フランスで亡命生活を送った作家ミラン・クンデラは、「人間の権力に対する闘いは、記憶と忘却の闘いである」と書き記しました。過去の出来事を書き記し、歌い、創作し、繰り返し語り継ぐこと、これこそが、私たちが忘れないための努力なのです。ぜひ、あなたの言葉をここに残してください。あなたの国の物語を共有し、台湾の物語を覚えていくくださるか、お聞かせください。私たち皆が忘れなければ、自由はきっと花開くでしょう。

失われた家族

ダブルコラージュの手法により、観る人を政治受難者の家庭へと導く。作品の左側には、意図的に空間を作り、薄い灰色の影だけが描かれている。これは、永遠に家族と一緒に写真に収まることのない受難者を象徴している。右側には、受難者の死のイメージを描いている。登場人物に表情が描かれていないのも、陳武鎮作品の特徴である。それは、これらの人々が「特定の個人」というわけではなく、当時、数多くの家庭が直面していた、苦しみや絶望を象徴しているからである。

声を奪われた時代

1945年10月、国民政府は台湾を接收し、中華民国の国内法に基づいた統治を開始しました。1949年、当時の台湾省行政長官兼台湾省警備総司令であった陳誠は、5月20日より（臨時）戒厳を発令。この戒厳令は、1987年7月15日に当時の蔣経国總統が解除を宣言するまで、実に38年56日にわたって続きました。戒厳令下、権力者は思想、言論、移動の自由を制限するため、さまざまな禁止令を発し、社会を厳しく統制しました。さらに、不当な裁判、拘束、そして死刑までもが行われ、人権に甚大な被害をもたらしたのです。

- ・声を奪われた時代Ⅰ - 禁じられた歌の回廊
- ・声を奪われた時代Ⅱ - 検閲された資料の展示エリア
- ・声を奪われた時代Ⅲ - 審訊室（取り調べ室）

審訊室（取り調べ室）

白色テロの時代、台湾各地には秘密の取り調べ室が数多くありました。これらは政治犯を拘留・留置し、取り調べや拷問を行うために使われた場所です。取り調べ室には、じゅうたん、監視用の覗き穴や窓、盗聴器、カーテン、防音パネル、24時間点灯し続ける明るい蛍光灯などが必ず備えられていました。

台湾 言論の自由への道

台湾が自由を手に入れるまでには、何世代にもわたる歳月がありました。エスニシティの別を問わず、民主化を求める闘士たちが、生死を顧みず、幾度となく、そして集中的に、権威主義体制に立ち向かい、ようやく「日常」の中に自由を築き上げてきたのです。

「台湾の言論自由への道」展示エリア、1945年から現在まで、台湾における言論の自由の歩みを軸に据え、人権の暗黒期から自由民主への過程を、真実で原初的な史料を通じて描き出す。

トラウマ

権威主義体制下における政治的暴力は、受難者本人の肉体と心に深い苦痛をもたらし、その家族や子孫もまた、「監獄の外の囚人」として、暴力と汚名の暗い影に覆われました。戒厳令の時代は遠い過去となりましたが、そのトラウマは、今日の台湾社会から、まだ消え去ってはいません。

白色テロ犠牲者の家族への手紙と遺書

権威が言論を封じた時代、自由を奪われた人々の人生は途中で断たれ、彼らは家族の中から「消された存在」となった。彼らの想いが託されたのは、決して届かなかったかもしれない家族への手紙や遺書の中である。ここでは、宋盛森、高一生、陳中統、黃溫恭、蔡焜霖、葉盛吉など、白色テロの受難者たちが家族に宛てて書いた手紙を展示している。一字一句には、父として、夫として、息子としての愛情と無念が刻まれている。それらを読む今の私たちは、胸を締めつけられる思いとともに、白色テロが人々に残した深い傷を忘れることはできない。

